

## 特集Ⅱ 三重県が輩出した奇才

### 高畑勲アニメ監督を偲ぶ

アニメーション監督の高畑勲が今春（2018年4月15日）亡くなった。享年82歳。1936年三重県伊勢市（旧宇治山田市）に生まれ、東大仏文科卒のエリートで、アニメ界に入った異色の作家である。2003年「三重映画フェスティバル」と2016年の「映画祭」で津へ招聘し講演をしてもらっている。三重県が輩出したいわば今日のアニメ界の礎を作った巨匠と言っても過言ではない。改めて高畑アニメ作品の顕彰と生前面識のあった方々に、彼の人となりについて書いていただいた。



#### 【プロフィール】

1935年 三重県伊勢市に生まれる  
1938年 父の転勤に伴い津市に移る  
1942年 父の転勤に伴い岡山に移る  
1954年 岡山県立朝日高校入学  
1956年 東大仏文科入学  
1959年 東映動画に入社

#### 【フィルムグラフィ】

1968年 太陽の王子ホルスの大冒険  
1972年 パンダコパンダ  
1982年 セロ弾きのゴーシュ  
1988年 火垂るの墓  
1991年 おもひでぽろぽろ  
1994年 平成狸合戦ぽんぽこ  
1999年 ホーホケキョとなりの山田くん  
2013年 かぐや姫の物語

## 回想の高畑勲監督

藤田明 映画評論家

1994年、松阪における国民文化祭で高畑勲さんを知った。映像部門は小型映画のグループで進められていた感があり、そこへ井土真杉氏や私たちは新たな面をも、と割り込んだのである。「三映振」のスタートだったし、後の三重映画フェスティバルへつながっていく。

上映も展示も高畑特集はジブリ以前が主だったろう。トークは啓蒙的だった。吉田喜重も小津で来演。夕方には控室の楽屋で語り合ったのを思い起こす。ふたりは東大仏文科で顔を合わせたのか否か。教室へさほど出なかつたと言うのは記憶に残るが。とにかく畳に横になりながらの楽しいひと時で、岡田茉莉子氏を伴わない際の吉田氏のほころび顔を読まれる方々、想像できますか。高畑氏は例の率直さだったが。

2003年、津で三重映画フェス。小津百年を主軸にしていたが、高畑デーも設けられた。上京前に電話すると、上京中に再度電話してほしいとのこと。結局もう一泊しないと会えないことになる。西武池袋線のさる駅前で、と決まり、雑談を交えながら寄稿と来津を承諾された。

高畑デーは津市も共催と決まった。市の側でつくったチラシを送ったようだが、ご本人は不満らしく、市の担当者ではらちが明

かないため私も電話で対応した。ジブリの高畑、宮崎と仲間の高畑といった文言が引っかけたわけで、デザインを含め、事前了解は当然との見解だった。当時はジブリとの関係、宮崎との間も微妙だったのかもしれない一件となる。

没後のお別れ会の前後に、鈴木敏夫氏へインタビューした映像がテレビに登場した。氏いわく、関係悪化の折もしばしばあった。やっと納得できたと言っている。

そんな高畑さんには芸術家魂をも感じとっていたわけだが。来県時のトークで氏は、見る側を作中人物に没入させるアニメーションの流行を批判。宮崎人気やジブリの姿勢に直接は触れないものの、その辺はチラシの件とも関連があるろう。

当日はだが、とてもいい一日だった。会場へ入る前、幼少時に住んだ辺りや、遊んだ御山荘橋へも。催しを終え、夕食時には次の構想をひそかにもらされたりなどした。

その後の氏との接点は伊勢新聞に3回ほど記した。海南友子のドキュメンタリー上映会に一緒に行く途中、大急ぎでラーメンを食べたこと、日本におけるフランス映画の最近の評価はヌーベルバーグに偏り過ぎると語られたこと、拙著を送ったところ、『やぶにらみの暴君』に触れたページにちなんで、新著が届いたこと、松阪での2013年の小津行事とかかわる記念誌のアンケートに他の人とは異なる回答を寄せられたこと等々。付け加えたいことも多々あるが、今夏の酷な状況下、果たすことができない。

それにしても、津の思い出が三重フェスの催し前に刊行された  
※「巨匠たちの風景」に収まったのは何よりであった。

作品で気が付く第一は、例えば音楽への細心の配慮。ガンガン  
鳴らす宮崎アニメの場合は、画面の方も通俗的な絵柄で、私は好  
きにはなれない。久石某にやらせ放題の例など結局はハリウッド  
調であり、高畑アニメとは水と油。今村太平やプレヴェールに行  
司をさせたくなる。

『パンダコパンダ』の簡潔さがいい。『火垂るの墓』はいわずも  
がな、『狸合戦』の土くささ、逆を行く『ホーホケキョ』の淡彩と  
空白の関係。どの場合も音楽の抑制との相乗効果であった。間宮  
の起用、三善晃への依頼というのも通俗とは一線を画す。最終作  
に久石某の起用とはいささか面食らったが、実際には抑えに抑え  
て成功につながった。

その『かぐや姫…』だが、貴公子登場の中間部はやや違和感、  
俗流が混じったのでは。はじめと終盤は最高の達成に至ってい  
たが。

子どものものとは切れた作品をもう一作求めたくなる。源平合  
戦で実現したのかもしれないが。

著作にも積極的で、最後のエッセイ集など、文化や思想の観点  
からも一流。他の監督にはあり得ない境地だと思う「柳川堀割物  
語」という異色ドキュメンタリーもある。芸術としてのアニメー

ションを追求してきた高畑勲ひとすじの道。現今の日本映画では  
稀有な存在を失ったのである。

※「巨匠たちの風景」みえシネマ事情

発行・伊勢文化舎

編集・三重映画フェスティバル2003実行委員会

発行日・2002年12月22日（第2刷）

## 高畑勲監督追悼

吉村英夫 映画評論家

### 「せんぐり いのちが よみがえる」

「♪鳥、虫、獣<sup>けもの</sup>、草、木、花…、咲いて匂って散ったとて、生まれて育って死んだとて、風が吹き、雨が降り、水車がまわり、せんぐり、いのちが、よみがえる…」(「せんぐり…」部分は三回の繰り返し)。

『かぐや姫の物語』で歌われる高畑勲自身の作詩作曲「わらべ唄」の一節である。映画を見終わると、もう旋律を口ずさむことができる。「絵」を書かない高畑が、作曲が出来るとは驚きである。歌詞の「せんぐり」は小津へのオマージュだと高畑自身が言っている。何かで読んだのか、あるいは本人から直接聞いたのか覚えていないのだが。『小早川家の秋』ラストの笠智衆の台詞、「けど、死んでも死んでも、あとからあとからせんぐりせんぐり生まれてくるワ」からである。小津にはめずらしく、人間の継続性への信頼がにじみ出るセリフである。「せんぐり(先繰り)」は「広辞苑」に「順ぐり」と出てくるから特別な語彙ではないが、日常生活では使われることはまずない。だから小津作品では、この言葉は見る者に強い印象を残す。小津がドラマの進行と少しずらして使った、人間のしたたかさや輪廻を表現するユニークな言葉を、高畑はみずからの人生観をもこめて歌いあげた。

この「わらべ唄」で高畑の人間への信頼感もはっきりする。私はいえ、「竹取物語」で、月に帰る姫にこれまで共感をもてなかった。人間世界の汚辱を嫌って逃げていくように解釈していた。だが高畑アニメは、貴族社会と対置させて「竹取物語」には出てこない山の民の捨丸<sup>すてまる</sup>(声・高良健吾)たちを登場させることで、人間の永続性と名も無き民衆への信頼を歌いあげた。本作のwowドキュメンタリーで、「姫が月に帰るのは(死)を意味する」のだと、高畑は「竹取物語」の新解釈を披瀝している。姫にとって地球は楽しく(生)の充満する世界だった。少なくとも鄙<sup>ひな</sup>で自由に生きた時期までは。貴族の薄汚い策略とは無縁の無名の民<sup>たみ</sup>の生の営みのなかに人間の幸福があった。月にはわらべ唄の世界の素朴な人間の匂いはない。

この映画のラスト近く、姫と捨丸が飛翔するあの歓喜こそが、人の世のあるべき姿なのだ。この飛翔と、繰り返しされるわらべ唄が描かれることで、高畑の遺作は映画史に残る傑作となった。自在に世界を飛び回ることの歓喜は、なにも宮崎アニメの専売特許ではないことを証明してもみせた。民への信頼を描ききったという意味で宮崎を超えたと言ってもよいのではないか。

高畑が逝った二〇一八年四月五日の冥界。松阪で育ち五年間を伊勢でおくった小津と伊勢で生まれて五十鈴という名の姉をもつ高畑は、がっちり初対面の手をとりあったことであろう。

高畑さんとは二回会っただけ。あとは電話少々と手紙数通、いや高畑さんからの手紙を探しても見つからないのだ、私の出したものの下書きは残っているのに。

二〇一六年四月一七日、三重県総文センター中ホールでの高畑さんの講演と『かぐや姫の物語』上映会。満員だった。夫人同行の来県だったが、あるいは肺癌であることを察知した高畑さんが、三重への最後の旅になることを予感していたからではないかと思ったりする。「鳥獣戯画」と高畑アニメの関係などが話の中心だったが、本題に入る前に、是非とも、戦災体験と反戦への思い、安保法制の危険性を熱く語った高畑さん。昂揚感のある話っぷりだったが、壇上以外での高畑さんは、いつものように気さくでもったいぶったところのない温厚な感じ。高畑夫妻と私と妻の四人が席を並べての高畑映画鑑賞だったが、これには私が緊張してしまった。

二〇一四年一月一二日、「小津安二郎記念碑」建立協賛依頼の手紙を私は書いている。旬日をへて協賛金が送られてきた。一五年三月、津大門観音境内に建立された記念碑裏面には、「高畑勲」も刻印されている。合掌。



## 『かぐや姫の物語』における死の美学

林久登 スタッフ

高畑の独自の解釈による物語の構成は素晴らしく、生身の役者による映画を超える感動的な作品に出来上がっている。

彼のアニメは大胆なデザインも魅力だが、アニメということでは奇をてらった動画を描くのではなく、自然の営みの細部を丁寧に描いているところが、好感が持てる。とりわけ昆虫や小動物、それに野の花々の描写は実写以上に見える。

原作ではかぐや姫は、天上界で姦淫を犯した罰で地球に送られて来たことになっているが、映画の中では説明はなく、いきなり竹取の翁と呼ばれる爺さんの手で竹の中から取り出されるところからはじまる。

天上人の住む月は、音も色もなく小動物も存在しない。しかし地球は豊かな色彩があり生きとし生けるものたちが共存し生命に満ち溢れている。そんな地球に来て、小動物と野山を駆け巡るかぐや姫の躍動感溢れる動画は素晴らしい。そして、はじめは手のひらに入るぐらいだった赤子が、僅か3ヶ月ぐらいの間にまぶしいぐらいの美少女に成長する。類まれな姫の美しさは次第に評判となり、5人の貴公子たちから求婚される。しかし、姫は彼らに

無理難題を課しことごとくその申し入れを退ける。

天上人であるものの高畑はかぐや姫が初潮を迎える場面をわざわざ撮り、彼女が普通の肉体を持った少女であり、想いを寄せてくれる男たちを、切り捨てる自分に悩む姿を見せている。彼女にとって都に入ってからの高貴な生活は苦痛のものとなっていく。

最後は帝にまで求愛され、遂に月に助けを求めることになる。(原作では自分が天上人であり結婚できないことを告げ、帝と文のやりとりでストイックな関係が続ける)そして姫は、満月の8月15日、遂に月に帰っていくことになる。

このシーンは特にファンタスティックで感動的だ。久石譲のこの世のものと思えぬ音楽に乗せて月からの迎えがやってくる。世話になった翁夫婦に別れを告げるかぐや姫は天上からの使者に羽衣を着せられると、同時に彼女は地球上での一切の出来事は消去され、無の世界に入っていく。

私にとってこの突然の変身、つまり生と死の一瞬の切り替わりは衝撃的で、今までに味わったことのない不思議な感動を伴うものだった。使者にうながされて羽衣を被ると、バーンとその過去一切を断ち切り去っていく。死に際の潔さともいうのだろうか。何という劇的な生命の幕切れなんだろう。

そして、蒼い地球を後にして、多くの友だちに見送られながら

月に戻っていく。目を見張るような美しい決別のシーンだ。

結局、高畑はそんな死生観のもとにアニメには珍しい彼岸しがんの世界に踏み込みながら、その対極にある此岸の、生きとし生きるものたちが共存し生命に満ち溢れている地球の素晴らしさを描きたかったのではないだろうか。

その高畑監督が、この春突然亡くなり、この『かぐや姫の物語』が遺作になってしまった。なんてことだ、旅だった彼の前にどんな世界が待っているのだろう。合掌。



## 究極の反戦アニメ『火垂るの墓』

森 次男 スタッフ

30年前に観た作品である。当時の見終わってからの印象は、あまりにも悲しい物語に不快さ、悲劇性を感じ拒否反応さえ覚えた。

今回は高畑監督を偲んで30年ぶりに観賞した。スタジオジブリは、『となりのトトロ』など明るい内容の名作を発表していたので、第二次世界大戦時を舞台にしたこの作品には違和感が残る。それは高畑監督が少年時代に体験した悲惨な戦争からあえて逃げずに真摯に描きあげた結果なのかも知れない。

過去に自分が観たアニメでは涙は誘われたが悲しみを味わうようなことはなかった。

しかし、このアニメは過去に13回もテレビで放映され、必ず10パーセント台の視聴率をたたき出しているのである。これは優れた作品は何度観ても新しい発見があるからではないだろうか？

私は海軍に所属していた父から戦地で飢えをしのいできた話を子守唄のように聞かされてきた。当時まだ小学生だった私には、あまりにも悲惨な内容で聞かされるのが拷問のようにも感じていた。ひとつのエピソードではあるが艦隊の食料が尽きると、船底のネズミを兵士たちが奪い合い、富裕層の生活をしていた兵士はそのネズミを口に出ることが出来ず、飢えから命を落として

いったそうだ。

この話の記憶はほとんど忘れかけていたが、昨年『野火』という戦争映画を観る機会があった。この作品を観た瞬間、父から聞かされていた戦地の壮絶な話が映像とともに甦った。それは目をつぶりたくなるような場面ばかりだ。炎天下の中で病と飢えに苦しみながら必死に生きる姿は想像を絶するものであった。

人間の極限を美化せずに描いたこの作品から『火垂るの墓』と共通したものを感じた。当時、父が伝えたかったのは、当たり前のように生活をしてご飯が食べられるということが、どれだけ幸せなことなのかだ。

五人兄弟の私には妹がいた。この妹は1歳3ヶ月のときに栄養失調で亡くなった。『火垂るの墓』でも主人公の妹の節子が飢えて亡くなる。30年前に観たときに涙したのは、節子と自分の妹が重なったからだ。私はまだ4歳になったばかりで、冷たくなった妹の亡骸に狂ったように泣き叫ぶ母の姿を見て、漠然と妹の死を感じ取った。今年もすでにこのアニメは放映された。冒頭から幼い妹と兄が死ぬというお涙頂戴の作品ではなく、さまざまメッセージを含みながら、命の大切さを強調している作品である。現在、戦前回帰でナショナルリズムが高まる中、反戦映画として、この映画の必要性は益々高まっている。

今の時代を読み取るかのように三十年前にこの作品を発表した高畑監督の偉大さを改めて知らされた。